

第33回アメリカズ・カップは何故ファンの支持を失ってしまったのか

Why did the 33rd America s Cup lose its backing of public opinion?

1K06B121

指導教員 主査 倉石平先生

鈴木 恵詞

副査 原田宗彦先生

【緒言】

アメリカズ・カップは、1851年から奪い合われてきた世界最古のスポーツトロフィーである。アメリカズ・カップを戦う事は、世界中のセーラーの憧れであり、“カップの勝者”には莫大な利益と、世界最高のセーラーとしての称号が与えられる。また同時に、建造されるレース艇には各国の最新鋭の技術が投入され、国と国との造船技術の戦いでもある。そんなアメリカズ・カップに異変が起きている。次回、第33回大会の開催を巡って、勝者と挑戦者が対立し、法廷論争にまで発展しているのだ。利権闘争が熾烈を極める事で、メディアには“もはや最高峰にあらず”と言われ、ファンの心はすっかり離れてしまっている。そんな第33回大会の迷走の原因と、それを取り巻く周囲の“冷めた雰囲気”を、歴史的な背景を踏まえながら考察した。

【研究手法】

過去の経緯については公式記録集と、小島敦夫・山際淳司、西村一弘の著作で調べた。しかし、日本では、ニッポンチャレンジがアメリカズ・カップへの挑戦をやめてしまった2000年以後、アメリカズ・カップ関連の本は出版されていない。そこで、第32回大会が終わってから今日までの迷走する33回大会へのいきさつについては、両陣営公式ホームページの発表と、ニューヨーク裁判所の裁判記録を調べ、それに対するマスコミや識者の論調は、セーリングニュースを専門に扱うサイトや専門誌『KAZI』

で確認した。これらの資料から、起こっている事の本質を理解するために一番重要なのは、アメリカズ・カップの憲法といわれる、「DEED OF GIFT(贈与証書)」原文に立ち返って本来の精神を理解する事と、裁判の中でそれがいかに読みかえられているかを理解する事であった。

【研究結果】

前回(第32回)大会が行われた後、勝者スイスの“アリング”は次回大会のプロトコルを開示した。そのプロトコルには次回大会の挑戦者代表が記されていたが、この内容を不服とした挑戦者アメリカの“オラクル”は裁判を起こし、25年間大会スポンサーを務めたレイ・ヴィトン社は降板した。そしてこの裁判が発端となり、王者と挑戦者の間では提訴と上告がひたすら繰り返されている。現在は“2010年2月に王者と挑戦者代表がマルチハル(多胴艇)を使って一騎打ち”という一応の結論は出ているが、開催地を巡る裁判は現在も続いている。そしてこのような一連の騒動は全て、WEBマガジンやツイッター等で、リアルタイムに全世界に配信されている。

【考察】

第33回アメリカズ・カップを巡る一連の迷走劇は、巨大な金が動くために、多くの関係者の利害と思惑が裏で絡み合っているのではないかと。勝者は手にした利権を手放さない為にルールを捻じ曲げ、挑戦者はフェアにレースを戦いたいのが為に裁判を起こしている。そんな

中、実際にレースを戦う選手は、利益を出す為のビジネスと“ 良いレースをしたい ” というスポーツマンとしての本音の間でもがいているのではないかと考える。

【結論】

これら一部の人間の利権闘争が、インターネットの普及で、一般の人々がリアルタイムで“ 見て ” しまった事が、アメリカズ・カップへの夢や畏敬を失わせ、人々の支持を失う結果になりつつあるのではないか。